

日蓮大聖人御書全集

はる
いわいごしよ
春の祝御書

新版
1840
ゝ
1841

はる いわいごしよ
春の祝御書

ぶんえい ねん がつ
文永12年('75) 1月
さい
54歳
なんじようときみつ
南条時光

はる 祝
春のいわいは、すでに事ふり候いぬ。

こ 南 条 殿 久
さては、故なんじようどのは、ひさしきことには候わざ

万 ごと 触 懷
りしかども、よろず事にふれてなつかしき心ありしかば、

疎 思 齡 さか 果 無
おろかならずおもいしに、よわい盛んなりしにはかなかり

別 悲 鎌 倉 打
しこと、わかれかなしかりしかば、わざとかまくらよりうち

下 おん 墓 み そうら
くだかり、御はかをば見候いぬ。

後 駿 河 便 思
それよりのちは、するがのびんにはとおもいしに、この

度 下

ひと

忍

来

たびくだしには人にしのびてこれへきたりしかば、

西 山

にゆうどうどの

知

そうら

うえ

ちから 及

にしやまの入道殿にもしられ候わざりし上は、力およば

通

そうら

こころ

掛

そうらう

ずとおりて候いしが、心にかかりて候。

こころ

遂

ごぼう

しょうがつ

うち

遣

その心をとげんがために、この御房は正月の内につか

おん 墓

じ が げ い っ かん 読

思

参

わして、御はかにて自我偈一卷よませんとおもいて、まいら

そうらう

おん 殿

おん 形 見

歎

そうら

せ候。「御とのの御かたみもなし」なんどなげきて候え

殿

留 置

喜

い

そうらう

ば、とのをとどめおかれけること、よろこび入って候。

ことの

き

下

叢

陰

通

ひと

ぶつぼう

故殿は、木のもと、くさむらのかげ、かよう人もなし、仏法

ちようもん

徒

然

思

そうら

をも聴聞せんず、いかにつれづれなるらん。おもいやり候

涙

止

殿

ほけきよう

ぎようじや打

具

えば、なんだもとどまらず。とのの法華經の行者うちぐし

おん墓

向

たも

嬉

て御はかにむかわせ給うには、いかにうれしかるらん、い

かにうれしかるらん。